猫との暮らし

室蘭市医師会
むろらん神経内科クリニック　大塚（おおつか）　千久美（ちくみ）

今、私は、３匹の猫たちと暮らしています。子供の頃から犬を飼っていましたが、大学院を卒業した春に念願だった猫を飼おうと、ペットショップを回り、顔がかわいいという理由で生後２か月のアメリカンショートヘアの男の子を家族に迎え入れました。顔、姿、仕草の全てが本当に可愛らしく猫の魅力にとりつかれ、ここから私の猫ファーストな私生活が始まりました。

「猫」を社会学的に研究し、『猫社会学、はじめます――どうして猫は私たちにとって特別な存在となったのか？』という本まで執筆されている東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻社会学講座教授の赤川学先生によれば、猫をかわいいと思う７つの要素は、①媚びないのに甘えるツンデレ、②優しくおとなしい性格、③心が通うという想像、④飼いやすさ、⑤完璧な造形と豊かな表情、⑥女王に捧げる無償愛。⑦幸せに暮す様子、だそうですが、個人的に刺さるのは、④「心が通うという想像」です。愛猫が飼い主のことをどう思っているかは、飼い主のよい想像でしかありません。大学病院に勤務していた頃、いつも遅くに帰宅して家のドアを開けると、２匹の猫がドアのほうをみて２匹寄り添って玄関ラグの上にいました。ラグを触るとだいぶ温まっているので、ずっと待っていたんだなーと思いジーンときていましたが、「猫の気持ちがわかる本」を買って読んだ時、そういう状況は飼い主を待っているのではなく、晩ご飯はまだかなーという気持ちで待っていると書かれていて、信じられませんでした。どうみても私を待っているように見えました。

結局、その後、飼い猫は３匹になりました。最初の子から、５歳違いのアメリカンショートヘア（♂）さらに５歳違いのロシアンブルー（♂）を家族に迎えいれました。そして10年前に開業のため猫３匹とともに北海道に帰ってきました。その後、４年前の冬に長男猫は、18歳で虹の橋を渡ってしまいました。猫の18歳は、人間なら88歳と言われているので大往生です。

その翌春３月下旬に、帰宅した私の車の前に突如小さな野良猫が現れました。それまで見かけたこともない猫でした。その日からご飯をあげて徐々に慣れてもらい、５月３日に保護、病院に連れて行きました。少し予想はしていましたが妊娠していてもう２、３日で産まれると言われ、慌てて地域の猫の保護施設で出産の見守りをお願いし、無事６匹出産しました。子猫は里親さんが決まり、母猫は、家の子となりました。初めての女の子でしたが、家猫訓練の途中、私の不注意で窓から脱走してしまい、19日間の捜索の末みつかり、今は穏やかに家猫として暮しています。

「猫社会学」の赤川先生は、現代ではペットが家族の一員として扱われ、猫は単なるペットではなく、人間との関係性の中で、さまざまな意味を持つ存在になっていると話されていました。私も仕事が終わり帰宅してから猫のお世話に時間はかかりますが、猫たちの幸せそうな寝顔をみて、フワッとした丸い体を撫でるだけで毎日癒やされており、私にとって猫たちは、かけがえのない存在です。

カボチャ

石狩医師会
石狩湾耳鼻科　間口（まぐち）　四郎（しろう）

毎晩、欠かさず般若心経を唱えてから床に就くのが習慣だった母。佐渡からはるばる北海道まで嫁いできた。遠くに出かけることを好まず、裁縫や畑仕事が好きだった。時間があれば朝から晩までお気に入りの鍬を持って野菜作りに精を出していた。真面目が過ぎて、父からよく馬鹿正直とからかわれていた。その母は毎年必ず冬至の日には自らが畑で育てたカボチャ入りのお汁粉を作っていた。「冬至のカボチャは体にいいんだよ」と何度も言い聞かせられていた子供の私は「カボチャさえ入っていなければ美味しいのに」と心の中で反発していた。

私は男の兄弟４人の末っ子である。ある時、母は「４人目こそ女の子だと父さんに言ってお前を産んだんだよ」と話し、また別の時は「お前が生まれて男の子だったときは本当にがっかりした」と悪びれた様子もなく言って私を驚かせた。歳をとり歩くのもおぼつかなくなった頃、「母さん、食べ物で何が一番好きなのさ？」と問うと、下を向き少しニヤリとしてひとこと「カボチャ」と呟いた。

その母が死んで10年になる。命日の冬の頃は墓は深い雪で覆われてしまう。誰も訪れない霊園にカンジキを履いて、愛犬と一緒に墓参りするのが毎年の自分の習慣になっている。半分以上雪で埋まった墓石の前の雪面に置くお供えはカボチャである。

この数年、必要に迫られ自分で料理をすることが多くなった私の献立レパートリーの中に、最近カボチャの煮付けが入ってきた。砂糖、醤油、みりん、日本酒で味付けすると、昔は苦手だったはずなのにこのカボチャがうまいのである。「シロー、そうだろ、カボチャはおいしいんだよ」と自慢げに語る母が見えるようである。